なんでも屋

サラダ味

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
なんでも屋

【Ｎコード】
Ｎ２６８４Ｍ

【作者名】
サラダ味

【あらすじ】
現代人が抱える悩みや不安を『なんでも屋』青波悠斗が引き受ける！

依頼1－1

客か？

駄菓子屋にはそぐわないスーツ姿の中年男性が店を覗いた。

「『なんでも屋』さんというのはこちらでよろしいのでしょうか？」

店内にいるばあさんとオレの顔を見比べながら尋ねる。

「はい、はい。ようこそいらっしゃいませ」

経営者のオレより先にばあさんが答えた。

男性は安堵と困惑の入り混じった表情を浮かべる。

みんな同じだ。

オレを訪ねてくる客は一様に同じ顔をする。

無理もない。

ここはどこからどう見ても、子供達の憩いの場『駄菓子屋』なのだ。

『なんでもや屋』である根拠は、電話帳に記載された電話番号と住所と、表によく見ないと見過ごすような小さな看板が掲げてあるだけなのだ。

オレは冷蔵庫から売り物のウーロン茶缶を取り出しどうぞ、と男性を店の奥へと招き入れた。

ばあさんがしっかりな、とサインを送った。

『なんでもや屋』の事務所は二階にある。

と、いってもばあさんから間借りしている畳敷きの八畳間だ。

食卓にも事務机にもなる万能座卓が部屋の真ん中に置いてあるだけの簡素な部屋。

オレが寝起きしている壁ひとつ隔てた同じ八畳間がゴミ溜めになっているなど知る由もない。

オレが気楽にしてください、と座布団とウーロン茶を勧めると男性は落ちつかない様子で腰をおろした。

「犬の散歩かなんかですか？」

オレは押入れからレターケースを取り出しながら尋ねる。休日の犬の散歩の依頼は少ない仕事依頼のなかでも割と多い。

男性はいえ、と口ごもる。

オレが『青波悠斗（ゆうと）』と記載された名刺を手渡しながら、では？と口にすると、男性は名刺を受け取りながら、

「実は……引き受けて頂けるものか……」

と、伏し目がちに語尾を濁した。

「なんですか？　仰ってみてください。法に抵触しない範囲でなら協力しますよ」

営業スマイルをつくり、オレはレターケースから依頼書を取り出す。

男性ははァと恐縮しながら白髪混じりの頭髪に手をやり、お願いしたいのは留守番なんです、と言ってウーロン茶缶を開けた。

依頼1－2

留守番!?　とばあさんは目を丸くした。
「そう、留守番」
オレは米粒を口一杯に含んだまま答える。
「留守番を他人に金まで払って頼むなんて変わったお人もいるもんだねェ」
そう言ってばあさんはタクアンを口に放り込んだ。
歳はいっているが意外に歯は丈夫だ。
気づいてないようだけど、とオレは笑う。
「ばあさんだって同じじゃねェか。他人のオレをロハで住まわせて、飯食わせて、おまけに店番までさせて」
オレがそう言うと、そうだったわねェ、と口元を押さえた。
オレはこの家で暮らし始めて六年になる。
名ばかりの大学に通うためオレはこの町にきた。
なるべく大学に近い所で安い物件はないかと不動産屋巡りをしている途中でこの名も無き駄菓子屋へ立ち寄ったのがきっかけだ。。
ジュースを買って咽喉を潤しているとばあさんが気さくに話しかけてきた。
オレが部屋を探しているのを知ると、それならちょうどいい、と二階の空き部屋を唐突に紹介された。
ばあさんは旦那と娘二人と暮らしていたが、旦那に先立たれ、娘二人も無事嫁ぎ、ひとりで暮らすようになった。
長女に家を売って一緒に住まないか、と誘われたらしいが、旦那とともに愛した駄菓子屋を閉めるのは忍びない、と断ったとオレに語った。
口にこそ出さなかったが、ひとりの生活に不安と寂しさを感じていたのだろう。
娘二人に同意を求めることなくオレに半ば強引に話を勧めてきた。

オレは番犬代わりになるのに躊躇したが、結局ばあさんが提示した格安の家賃と、八畳二間を自由に使用してもいい、という言葉に惹きつけられ、ここで暮らすと決めた。

ただ、ここ二年間、大学を卒業して『なんでも屋』を開業してからは、家賃も払ってなければ、タダ飯も食わさしてもらっている。

今ではオレの恩人だ。

「たださァ、変な注文つけてきたンだよなァ」

どんな？　と、ばあさんは興味深そうに聞く。

「留守番している間は音を立てず、なるべく静かに過ごしてくれ…」

…とさ」

「テレビもダメってこと？　そりゃァ～時間潰すの大変ねェ」

「先方も本でも持ってきてくれ、って言ってたよ。まァ、退屈かもしンないけどさ、ゴロゴロしてりゃァ仕事になるンだからさ」

オレはそう言って箸を置いて横になったが、ばあさんにここではそうはさせないよ、と風呂掃除を命じられた。

依頼1－3

午前七時半――。
それが依頼人・城村英輔との待ち合わせ時刻だった。
城村は朝早くからすみません、と恐縮していた。
待ち合わせは城村の家の近所の公園だった。オレが迷わないようにと案じたためだ。
城村は、家まで案内します、と言って歩き出す。
オレは眠い目をこすりながら後に続く。
昨夜はどうせ退屈な時間を過ごすのだから、と夜更かしした。
その仕事に対する心構えの悪さにバチがあたったのか散歩中の犬に激しく吠えられた。
「すみません、普段はおとなしいンですよ、ねェ」
飼い主は謝罪よりもペットへの愛情にウエイトを置いた。
城村は災難でしたね、というような顔でオレを見た。
オレはそういう連中からも仕事を与えてもらっているため文句は控えた。
公園から五分ほど歩いた所に城村の家は建っていた。
一見するとオレが想像していた留守を心配するような立派な造りではなかった。それでも留守番を依頼するくらいだからなにか大切なものがあるに違いない。
城村がドアノブに手をかけて振り返った。
すみませんが、と言って人差し指を口に持っていった。
オレにはなぜそうしなければならないのか理解し難かったが、依頼人に従い無言で家に入った。
玄関を上がるとキッチンを抜けリビングに通された。
留守番を引き受けたはずなのに自然と空き巣のような忍び足になっていた。
城村の妻が三人掛けのソファーから立ち上がりオレを出迎えた。

よろしくお願いします、と声を落として頭を下げる姿に弔問に訪れたような気分になる。
ソファーに腰を下ろす。
コーヒーか紅茶でも、と勧められると思ったが、二人は出掛ける準備をしていた。
ぐるりと部屋を見渡す。
高級そうな絵画や置物は見当たらない。
もっとも目が利くわけではないからあてにはならない。
オレに留守番を依頼した理由は今もってわからないままだ。
「そろそろ出掛けますのでよろしくお願いします」
城村夫妻が恭しく頭を下げた。
五時には妻が戻ります、と言って出てゆく。
オレは腕時計に目をやる。
八時を少し回ったところ。
長い一日になりそうだ、とソファーに倒れた。そして予定通りに目を閉じた。
十分――。二十分――。
すぐには眠りにつけなかった。
やはりオレに留守番を依頼した理由が気になる。このまま午後五時を迎えられるとは到底思えない。
なにか訳があるはずだ。
ピッ！
と、腕時計のアラームが鳴ったそのとき、天井の方から物音がした。物音は一定のリズムで移動してゆく。
足音！
オレはソファーから跳ね起き息をひそめた。
――誰かいるのか？

依頼1－4

泥棒。

咄嗟に頭に浮かんだのはその二文字だった。

やはりこの家には城村が懸念したなにかがあるのだ。それならば留守番を引き受けた以上阻止するのがオレの役割だ。

オレは忍び足でキッチンへ進み、廊下の手前に身をひそめ聞き耳を立てた。

二階の方からドアを開ける音がした。続いて耳に飛び込んできた音は意外なものだった。

――泥棒じゃないのか？

階下まで響いたのはまぎれもなくスリッパの音だった。そんな行儀のいい泥棒はいるはずがない。

しかしその音は逆にオレを混乱させた。

――誰なんだ。

城村はなにも言わなかった。それに、オレが来てからも他に住人がいる素振りなどみせなかった。それなら……。

足音の主は階段を下りてきてどんどん近づいてくる。オレはリビングまで引き返し、ソファーの陰に隠れ様子を窺う。

キッチンに入ってきたのはオレと同年代くらいの女性だった。白の上下のスウェット姿で長い髪をひとつに束ねている。

やはり泥棒には見えない。

彼女はごくごく自然な振る舞いで冷蔵庫に手を伸ばし、コップになにかを注ぎテーブルにつき雑誌を開いた。

オレは出ていくべきか迷った。

常識で考えれば彼女は城村夫妻の娘だ。しかし、城村はオレにその存在を告げなかった。それ以上に彼女はまるでオレの存在に気づいていない。つまり彼女もオレという存在を事前に知らされていないということだ。今出ていけばオレこそが不審者だ。

城村はいったいどういうつもりで……。
雑誌のページをめくる音がやけに響く。
判断しなければならない。
このまま彼女が部屋へ戻るのを待ち、その後城村に連絡し事情を聞くのが賢明だろうか？
しかし彼女がリビングに移動してくることも考慮しなければならない。
そうなれば、騒ぎ立てられ事情を説明するのも困難かもしれないし、下手をすれば警察沙汰にまで発展しかねない。それだけは勘弁だ。
そうなる前に――。
オレは意を決してゆっくりと両手を挙げて立ち上がった。
銃を構えた警察に投降する犯罪者のように……。

依頼1－5

多分、彼女は驚いたのだろう。
オレの姿を見た彼女は目を見開いたまま硬直していた。
「恐がらなくていい」
オレは両手を挙げたまま彼女の様子を窺う。頼むから騒がないでくれ。
「声を上げる前にまず、話を聞いてくれ。わかったら首を縦に振ってくれ」
オレの問いかけに彼女は小さくうなづく。オレは彼女との距離を詰めず、挙げていた手を下ろした。
「オレは『なんでも屋』の青波悠斗。城村さんの依頼で留守番を引き受けてこの家にいる。不審に思うなら城村さんに確認してみてくれ」
オレの言葉を聞くと彼女に表情が戻った。そして、コップの中身を一気に飲み干した。
「パパは私がいること話さなかった？」
「オレを信用したのか？」
「心当たりがあるからね……」
彼女はそう言って体勢を変えた。イスの上で体操ずわりになる。
「なにか飲み物もらっていいかい？」
オレはキッチンへ足を進めた。冷蔵庫を指差す彼女に警戒の色はない。
流し台に伏せてあるコップを手にして冷蔵庫を開け、ウーロン茶をみつけて注ぐ。オレもなかなか図々しい。
「名前は？」
コップを持って彼女の前にすわる。
「沙緒（さお）……」
沙緒は気だるそうに答えた。

「で、心当たりってのは？」
「青波さん……だったけ。パパが私のこと話さなかったのはそれなりの思惑があってのことだと想像つくでしょ」
「なんとなくは……」
ただ、その思惑がなんなのかはさっぱりわからない。
沙緒はカラダを前後に揺らしながら口を開く。
「パパはきっと、アナタに私を会わせたかったンだと思う。カン違いしないでね。そういうのではなくね……」
それはオレにもわかる。沙緒とは初対面なのだ。彼女にしても恐らくそうだろう。
「私はある問題を抱えてるの。パパはその問題解決にアナタの力を借りたかったンだと思う」
「問題というのは？」
オレは尋ねながら厄介なことを引き受けたな、と後悔する。
「私は世間でいうところの『ひきこもり』なの」

依頼1－6

「まッ、ネズミみたいなもんよね」
沙緒は薄く笑い冷蔵庫を開ける。
テーブルにタマゴとタコさんウインナー。
「人がいなくなるとこうやって食べ物漁るンだから」
オレはなるほど、と笑う。
「やっぱりそう思ったンだ……」
オレは違うよ、と否定する。
「留守番を引き受けるとき、お父さんが妙な注文をつけたンだよ。『できるだけ静かにしてくれ』ってね。それがネズミを誘い出すことだったとわかったンでね。」
「それで私がのこのこ現れたのがおかしいわけね」
沙緒は少し拗ねて流し台の下からフライパンを取り出した。
「青波さんは食べてきた？」
「エサを用意してくれる人がいるンでね」
「そんなこと言っちァ、奥さんに失礼よ」
オレはそれも間違っている、と言って、オレの現況を話した。
「青波さんも変わってるわねェ」
沙緒はこれが大好きな大臣もいるのよ、とタコさんウインナーを口に放り込んだ。
オレにはこの明るい彼女がひきこもっているようにはとても見えなかった。
ただ、そこに立ち入る気はなかった。
父親の城村にしたってそこまでは期待していないだろう。沙緒の様子を少しでも知りたくてオレに依頼したに違いない。
オレは見たままの沙緒を伝えればいい――。
「それにしてもパパはどうやって青波さんを知ったのかしら。駄菓子屋なんて気にも留めないはずなのに……」

沙緒の疑問に対してオレは心当たりがあった。
なぜならそのことでオレに対する仕事依頼がわずかながら増えたからだ。
「三ヶ月くらい前に新聞に載ったンだよ。それ以前に引き受けた仕事の依頼者が投稿してね」
沙緒はオレの話に俄然興味をもったようだった。話して、話してとオレを急かす。
本来、仕事内容を他言するのは憚れるが、依頼者本人が公表していることだし、とオレは五時までの退屈凌ぎに沙緒に語ってやった。

依頼２－１

半年前――。
西日が射す駄菓子屋にひどく憔悴した男がやってきた。
男は肩から大きめのスポーツバッグを提げていた。
ばあさんは訝しげに男をみた。
オレは怪しければ怪しいほど客である可能性があったから、丁寧にいらっしゃいませ、と迎え入れた。
「『なんでも屋』はここでいいのか？」
男はその様子とは違い横柄に尋ねてきた。落ち窪んだ目に異様な光がある。
オレは内心腹を立てたが、わかりにくい場所ですみません、と言って二階の八畳間に通した。
男はオレが座布団を勧める前に、自分で手に取って胡坐をかいた。
「なんでもやってくれるンだな」
「法に抵触しない範囲でならお手伝いします」
オレは決まり文句を言って、押入れからレターケースを取り出した。
男はスポーツバッグを開け、なにかを取り出そうとしている。
「お急ぎですか？」
男は答えず、取り出したものを食卓にも事務机にもなる万能座卓の上に並べた。
それは――ゲーム機だった。
人気のＲＰＧの最新作ソフトが脇にある。
オレはそれらを目の端に捉えながら依頼書とペンを差し出した。
男は乱暴にペンを走らせながら言った。
「レベル上げをしてくれ！」
オレは呆気にとられて返事ができなかった。
「やったことないのか？」

「いえ……」
オレはゲームをそれほど好きではないが、さすがにこの人気シリーズだけはやったことがあった。ただし、途中で飽きてクリアーはしてないが……。
「ストーリーは進めなくていいからガンガンレベル上げをしてくれ。装備もその地点までの最強のものに整えてくれ。ただしボスキャラは倒さないでくれ」
男は強い口調で言い、依頼書をオレに差し出す。
オレは依頼書に目を通し名前を確認する。
樋田荘司（ひだしょうじ）
「樋田さん、主人公の名前はどうすれば……」
「その必要はない。もう入力してある。明日も同じくらいの時間に寄るから、できるだけレベルを上げといてくれ。頼む！」
オレは男の迫力に圧倒され、この訳のわからない依頼を引き受けることになった。

依頼2－2

「はァン」
と、店じまいを終えたばあさんが、背後でため息にも似た声を漏らした。
駄菓子屋の二階。
オレが寝起きしている八畳間。通称ゴミ溜め。
「それが仕事ねェ……」
「なァに言ってやがる。ばあさんだって似たようなもンじゃねェか。売り物のコマ回したりゴム飛行機飛ばしてるだろ」
「ありゃァ～アンタ、『デモンストレート』ってヤツだよ」
英語を使って満足気な顔。
オレはあえて訂正しない。
相変わらず汚いねェ、と言いながら、ばあさんがオレの横に腰を下ろした。
「どうして自分でやらないンだい？」
ばあさんが仕事について聞いてきた。
「さあな……」
本当にオレにもわからない。面倒くさいのか、それとも他に理由があるのか……。
「『タクト』って誰だい？」
「依頼人がキャラにつけた名前だよ。アノ人の名前は樋田荘司だからきっと思い入れの……」
「お子さんかねェ？」
口を挟んできたばあさんの意見を、オレはなるほど、と聞いた。
樋田は憔悴していて幾分老けて見えたが、オレよりひと回りぐらい上の年齢だろう。だとすれば子供がいても当然だし、キャラに子供の名前をつけても不思議ではない。
「でも、私だったら子供の名前はつけないわねェ」

「なんでだよ。仮想世界とはいえ先頭に立って活躍するンだぜ。より熱が入るってもンだろ」
「それはアンタ、男親の考えだわね。母親の立場で言わしてもらえば、たとえゲームでも子供だと思っているものが死ぬのは嫌だわね」
「へェ～、そんなもンかねェ」
「そんなもんよ」
オレが感心していると、ばあさんはそろそろ煮えたかねェ、と立ち上がった。どうやら料理ができあがるまでの暇つぶしに来たらしい。
「でも――旦那の名前だったらつけられるわね」
ばあさんはオレの背中を叩いて、笑いながらゴミ溜めを後にした。

依頼2－3

翌日。
樋田は言っていたとおり、ほぼ同じ時間にやってきた。
この一日の間になにがあったのかわからないが、昨日以上にやつれた姿で現れた。
「レベル9までは上げましたけど、よろしかったでしょうか？」
樋田はああ、とだけ言い、もくもくとスポーツバッグにゲーム機を詰め込んだ。そしてバッグを肩に提げると、大きく息を吐いた。
「君の努力が報われるよう、君自身も祈ってくれ」
樋田は目を潤ませながら、震える声でそう言って、足早に出て行った。

更に翌日。
樋田は再び現れた。
目の周りこそ疲れた様子が見てとれるが、表情はそれまでとは違い晴れ晴れとしていた。
ばあさんに頭を下げると、興奮気味にオレに近寄ってきた。
「君のおかげだ、ありがとう！」
「ちょ、ちょっと待ってください。オレにはなにがなんだか……」
「息子が、タクトが目を覚ましたンだよ」
「樋田さん、ちょっと落ちついてください。最初からゆっくりと説明してもらわないと……」
樋田はすまない、と言って、ハンカチを取り出し額を拭った。
「お子さんがどうかしてたのかい？」
ばあさんが売り物の缶コーヒーを樋田に差し出した。
「ありがとうございます」
樋田は美味そうに一口飲んで落ち着きを取り戻した。
「実はここに仕事を頼みにきた日の午前中、息子がゲームを買いに

行った帰り道で事故に遭ったンです」
　オレとばあさんは無言で顔を見合わせる。
「手術後、意識の戻らない息子について医者は助かる見込みは五分五分だと言いましてね。それでなんとか息子の意識に呼びかける方法はないものかと嫁さんと思案した結果、三度の飯よりゲーム好きな子ですからゲームの音でも聴かせれば反応するンじゃないかと医者も呆れるようなことを考えまして……」
「医者がどんな顔をしようと、親ならではの特効薬、治療法はあると思いますよ」
　ばあさんの言葉に樋田はありがとうございます、と頬を緩めた。
「タクトはほんとにあのゲームを楽しみにしてました。私はキャラクターに息子の名をつけ、ゲームの中のタクトもがんばってるぞ、と励ますつもりでした。ただ、気がついたンです。ゲームの中のタクトが死んでしまったら……と。そう思ったら、もうゲームに手を触れられませんでした。レベル上げして、敵に負けない状態にしてからでないとスイッチを入れられない。そのことを嫁さんに話したら、タクトと行ったことのある駄菓子屋さんに『なんでも屋』という商売をしている人がいる、と聞いたンです。それでお願いしようとここを訪ねたンです」
　オレはけっこうな大役を担わされていたことを知って肝を潰した。
　これでもし樋田の息子が助かっていなければ、オレはどんな顔でこの話を聞けばよかったのだろう。
「ただ、目覚めた息子に怒られましてねェ。勝手にゲームをやるな！　と」
　樋田はオレの気持ちなどよそに、頭をかきながら豪快に笑った。

依頼１－７

退屈凌ぎに――と考えたのは沙緒も同じだったようだ。
話を聞き終えた空腹を満たしたネズミは、さっさと巣へ帰っていった。
少し拍子抜けした感もあったが、オレは今度こそ、とソファーに身を沈めた。夜更かしの努力が実って、眠りに落ちるまでそれほど時間は必要としなかった。
眠りからオレを呼び戻したのはインターホンだった。
腕時計に目をやると十二時半過ぎ。けっこう眠った。
オレが応対するべきか考える間もなく、沙緒が勢いよく階段を下りてきた。
漏れ聞こえる会話で、来訪者は宅配便業者だとわかった。
オレはその場から動かず、再度目を閉じる。
だが、再び夢の住人になるのを沙緒によって妨げられた。青波さん、とひきこもりらしからぬ明るい声でキッチンから呼びかけられた。
「お昼ごはんはどうするの？」
「お気遣いなく」
オレは横になったまま答える。もともと昼飯は抜くつもりだった。
沙緒は部屋に戻らずリビングを覗いた。
荷物を小脇に抱えている。荷物には有名なネット販売業者の文字。本かＣＤかＤＶＤでも注文したのだろう。一日中家にいるにはそれなりに時間を潰すものがいるようだ。
「留守番してるから食べに行ってもいいわよ」
沙緒の冗談に頬が緩んだ。まったく妙な留守番になったものだ。
「五時までだったわよねェ」
オレが起き上がりながらそうだよ、と返事をすると、沙緒はまだまだ先は長いから作ってあげる、と微笑んだ。

断る理由はなにもない。
「じゃァ、頼もうかな」
オレがそう言うと、沙緒はけっこう上手なンだから、と早速冷蔵庫を漁りだした。
オレにはその姿が、ある女性と重なって見えた。

依頼3－1

樋田親子の記事が新聞に載って間もなく、一人の女性がオレを訪ねてきた。

駄菓子屋の二階の八畳間。

午前九時――。

「朝早くからすみません」

女性は正座して丁寧に頭を下げた。

ボヴスタイルに切りそろえた毛先がはらりと落ちる。

歳はオレより少し上だろうか？　化粧ッ気のないその顔にはどことなく暗い影が差していた。

「ご用件は？」

オレはレターケースから依頼書を取り出し、万能座卓に置いた。

「意外とお若かったンですね……」

予想だにしなかった言葉に、オレは返答に困った。

女性は変なこと言ってすみません、と依頼書に名前を書き込んだ。

オレは『間山泉（まやまいずみ）』という達筆な文字を目で追った。

「お願いしたいのは今夜なンですけど大丈夫でしょうか？」

なんとも急な話だ、と思っているオレを、彼女は横目で見た。

その目はなんとも寂しそうだった。今にも涙が零れ落ちそうなくらい潤んでいた。

オレはその目から視線をそらせないまま、法に抵触しない範囲での依頼なら大丈夫です、と決まり文句を混ぜて答えた。

彼女は小さくよかった、と呟いてすッと目を伏せた。

「それで……今夜どこでなにをすれば？」

「お食事に招待したいンです」

「はあ……」

突拍子もない依頼に、オレは言葉を失った。

「腕に自信はありませんが、私の部屋で私の手料理をアナタに食べ

てもらいたいンです」
「手料理を……。それだけでいいンですか？」
「はい。それだけで結構です」
「そうですか……」
「ダメでしょうか？」
彼女はオレの顔を覗き込む。
「いえ、お引き受けします。ちょっと驚いただけで……」
彼女は安堵の表情を浮かべた。
オレは彼女から住所と訪問する時刻を聞いて書き留める。
オレが書き終えると、彼女は準備がありますから、と言って立ち上がった。
「それでは今夜お待ちしてます」
そう言って去ってゆく彼女の後ろ姿を、オレはただただ呆然と眺めた。

依頼３－２

「まったく今時の女はなにを考えてるンだろうね」
ばあさんがはたきを乱暴に振りながら悪態をついた。
「アンタもアンタだよ。なんでもかんでも簡単に請け負って」
オレは黙ったまま入荷した駄菓子を並べる。ばあさんが女に厳しいのはいつものことだ。
「アンタ知らないのかい？　事件の陰に女あり――ってね。面倒なことに巻き込まれないように気をつけなよ」
「ばあさん、飛躍し過ぎだよ。サスペンスドラマでもあるまいし。飯を食いにいくだけなンだから事件なんて起きやしないの」
「そういう油断が命取りになるの」
オレの鼻先にはたきを近づけ強い口調で言った。
「はい、はい十分注意します」
「わかってるふうには見えないわね」
ばあさんは鼻息を荒くして、はたきを振り回した。

午後六時半――。
ばあさんの心配をよそに、オレは軽い気持ちで間山泉の家に向かった。彼女の話によれば、マンションに一人住まいだということだ。ただ、そのマンションが分譲マンションであることがばあさんの懸念材料のひとつとなっていた。
しかし、オレにしてみればばあさんの考えは古いと言わざるを得ない。今時独り逞しく生きる女性など珍しくない。
それだけで彼女がドラマや小説のように、オレを陥れようと策略しているとは到底思えなかった。もし彼女への懸念をひとつあげるとするなら、せいぜいその強さを感じられなかったというぐらいだ。
約束の十分前にドアの前に立った。ローマ字で『ＭＡＹＡＭＡ』と刻まれた金属プレートにを目にしてからインターホンを押す。

わずかに心音が高鳴る。
スピーカーから彼女の声が響き、オレが名前を告げるとまもなくして彼女が扉を開けた。
「わざわざすみません……」
「仕事ですから……」
扉から出てきた彼女を見てオレは驚いた。
きっちりとメイクを施した彼女は、今朝見た彼女とは別人のようだった。
どうぞ、と部屋に招かれたとき、どこからともなく面倒なことに巻き込まれないように気をつけなよ、というばあさんの声が聞こえてきた。

依頼3－3

「もうすぐできますので」
オレは身を硬くしてテーブルについていた。
「もっとお洒落な料理を期待してませんでした？」
「いえ、なにも考えてなかったです」
テーブルの上にはきんぴらや里芋といった惣菜と、トマトサラダ。それに伏せられた茶碗とお椀が並んでいる。意外といえば意外だ。
「どこの家庭の食卓にも並ぶ料理を是非食べて欲しかったンです」
間山泉はサバの味噌煮を運んできた。味噌の香りが食欲をそそった。
彼女はすッとオレの前の椀に腕を伸ばす。
オレはその手を見て違和感を覚えた。年齢の割りにかさついている。彼女がなにで生計を立てているか聞かなかったが、その手から苦労が滲みでているような気がした。
「どうぞ召し上がってください」
彼女はエプロンを外し、オレの向かい側に腰を下ろした。
オレは自分ひとりがご馳走になると思っていたがどうやら違った。彼女も一緒に食べるようだ。
「いただきます」
オレは目のやりどころに困りながらワカメのみそ汁に口をつけた。
「青波さんはおばあちゃんと二人暮らしなんですか？」
「いえ、厄介になってるだけです」
オレはそう言って、今に至る経緯を話した。黙々と食事をするよりは居心地がいい。
「おもしろい関係ね。聞くとなんだか心がほッとする。普段の食事もおばあちゃんが面倒見てるンです？」
「金が無いですから……」
「じゃあ、普段からおいしいお惣菜を口にしてるンだ。私はお金使

って恥かいてるようなものね」
「そんなことないですよ。ばあさんのより美味いですよ。なにより景色が違いますから。ばあさんの顔見て飯食ってたら、三ツ星もらうような料理人の料理でも星ひとつ減っちゃいますから」
オレの軽口に彼女の頬が緩む。
「だから、なるべくテレビのほう向いて食ってますよ。いつもサスペンス好きのばあさんにつき合ってますけど、ばあさんの顔より血生臭いシーンのほうがまだましですから……」
オレの冗談に彼女の顔色がさッと変わった。調子に乗りすぎたか……。
オレがすみませんと頭を下げると、彼女の目から大粒の涙が零れた。
「私……夫を殺したの」

依頼３－４

間山泉の唐突な告白に、イスから腰が浮きそうになった。オレの決まり文句を覚えていないのか……。

「ごめんなさい。アナタに迷惑をかけるつもりはないの……」

彼女はハンカチで目頭を押さえた。

箸を持ったまま、重苦しい雰囲気がしばらく続いた。もちろん食欲などとうに失せている。

「何も聞かないのね」

彼女が沈黙を破った。沈黙は時に沈黙を破るきっかけになる。

「食事をしにきただけですから……」

オレは里芋を口に放り込んだ。なかなか咽喉を通らない。

彼女は無理しないで、とオレにお茶を注いだ。

彼女がなにを期待しているのか知らないが、オレは彼女の問題に立ち入る気はなかった。目の前の料理を片づけることだけに専念しようと考えた。

彼女はオレが食べ終えるのを黙って見ていた。

「ごちそうさま」

オレは静かに箸を置いて、手を合わせた。

「ありがとうございます」

彼女は消え入りそうな声で言った。

席を立つには絶好のタイミングだったが、彼女がそうはさせてくれなかった。

「青波さんと時間を過ごしたら、警察に出頭するつもりでした」

オレは是非そうしてください、と毅然と言って、席を立つ。

そのオレの袖を彼女は掴んだ。

「夫に女としてのプライドをズタズタにされたまま出頭することはできませんでした」

彼女の目から再び涙が零れた。知りたくもなかったが、夫殺害の

動機の一端が見えた。

「荒みきった心のままではなく、女として……女として警察に向かいたかったンです。青波さんを食事に招いたのはそのためです。罪を償うにしてもなにかひとつ心の拠り所が欲しかったンです。もう一度女として生きていくために……」

間山泉はそう言うと、膝から崩れ落ちた。

彼女にかける言葉がみつからなかった。

なにより彼女の告白にオレは恐怖を覚えた。

オレは彼女に帰ります、とだけ告げて、逃げるようにマンションを去った。

翌日、新聞で彼女の記事をみつけた。彼女が望むべきものを手にしたかどうかは藪の中だ。

依頼1－8

料理の腕を自慢していた沙緒が作った昼飯はチャーハンだった。
臆面もなく言うだけにけっこう美味い。
オレが褒めるとこんなの誰でもできるわよォ、と謙遜したが、表情は嬉しそうだった。
「『なんでも屋』を始めたきっかけは？」
ガツガツとチャーハンをかき込んでいるオレに沙緒が尋ねてきた。
「成り行きかな」
口一杯にチャーハンを詰めたまま答える。
「オレも今で言う『就職難民』の一人でね。まァ名ばかり大学生だったから仕方ないッちゃァ仕方ないンだけどね。就職も決まらないまま卒業を迎えて先行き不安に陥ってたら、ばあさんに就職決まるまで店を手伝え、って言われてね。駄菓子屋兼ばあさんの雑用という仕事にとりあえず就いたわけだよ」
お茶をひと口飲む。
「そしたらばあさん、それだけじゃなく近所の年寄り仲間にも困ったことがあったらオレが手伝うと触れ回りやがって、買い物を手伝わされたり庭の手入れを手伝わされたりして微々たる小遣い貰ってたわけだよ。そのうちに閃いたンだよ。これなら商売になるンじゃないかと。まァ浅薄な考えだったとすぐに気がついたンだけど、けっこう性に合ってる気がしてね。それでばあさんに頼み込んで、駄菓子屋に看板揚げさせてもらって今に至るというわけだよ」
一気にしゃべってお茶を飲み干した。
「なんだかんだ言っても、おばあちゃんのおかげってわけね」
「んッ、まァ……」
認めたくはなかったが、事実そうであるから仕方がない。ばあさんの高笑いする顔が浮かんだ。
「最初のお客さんは覚えてる？」

「覚えてるけど話さないよ」
「守秘義務ってやつ？」
「そんな大袈裟なものじゃないけど一応自分に課したルールってことで……。ただ、やっぱり看板揚げなきゃよかったと思える仕事だったとだけ言っておくよ」
「余計に聞きたくなるじゃないッ！」
オレは笑いながら最初の依頼を思い出していた。

依頼4－1

その時オレは、多分、仏頂面をしていたと思う。

『なんでも屋』の記念すべき第一号の客を迎えていたというのにだ。

新品の万能座卓を前にしている客は、この街のちょっとした有名人だった。それでも歓迎できないのは評判がよくない人物だったからだ。

その人物の名は山野田（やまのだ）タキという。小柄で老人のように見えるが、ばあさんの話では見た目よりずっと若いという。

なぜ悪評がたっているかといえば、タキの家に問題があったからだ。タキの家は塀の内側から外側までびっしりとゴミが積みあがったゴミ屋敷だったのだ。近隣の住民はかなり迷惑しているという。

そのゴミ屋敷の主人がオレに依頼しにきたのだから仕事内容は想像に難くない。

それでオレは渋い表情になっていたのだ。

タキは背中を丸めてすわっていた。小さいカラダが余計に小さく見える。

気分は乗らなかったが、オレはタキに依頼内容を尋ねた。

「猫が、猫が持ってちまったのサ」

タキは定まらない視線で、ぼそぼそと囁くような声で言った。どうやらオレが想像していた内容とは違うようだ。

「タキさん、なにを持ってかれたンですか？」

「だから言ってるだろ。昼寝してる間に持ってかれちまったのサ、猫に……」

「タキさん、話がわかりません。猫に持ってかれたものをオレが探せばいいンですか？」

オレはついつい口調が強くなってしまった。

「ぴーちゃんを早く探しておくれよ。ぴーちゃん寂しがってるから

…」

タキはぼろぼろの布袋からがま口を取り出し、これで足りるかい？　と四つに折りたたんだ一万円札を万能座卓の上に置いた。オレは慌ててタキに尋ねる。

「タキさん、ちょっと待ってよ。なにしていいのかわからないのに金だけ受け取れないよォ。『ピーちゃん』ってなに？　オレはそれを探せばいいのか？」

オレの問いに対してタキは、ぴーちゃんを早く探せと何度も繰り返した。

オレは前途多難な船出だと頭を抱えた。

依頼4－2

「そりゃァ人形のことだよ」
と、ばあさんはみそ汁の入ったお椀を置いて言った。
「アンタは学校で遊び呆けていて知らないかもしれないけど、タキさんたまにだけど買い物に来てたからねェ。いつも人形抱いていて、『ぴーちゃん』って話しかけてたからねェ」
「人形か……」
オレは猫がゴミの山の上で人形を咥えている姿を想像した。
「旦那さんに先立たれて、一人娘も嫁いで寂しかったンじゃないのかねェ。人形を我が子のように愛おしそうに撫でてたのを覚えてるよ」
我が子同然のものが突然なくなったショックはかなりのものだっただろう。オレはタキに少し同情した。ただ、あのゴミの山から探し出すことを考えると、やはり億劫になる。
オレは取り乱していたタキに明日行くから、と約束して、とりあえず引き上げてもらったのだ。
「それにしても、タキさんはなんでゴミを集めだしたンだろうな」
「さあねェ……。近所の人の話だと、ゴミを拾い集める姿をみかけるようになったのは、娘さんが嫁いでからしいけど、どうしてかねェ……。アンタの方が理解できるンじゃないの？」
ばあさんは天井に視線を移した。その方角の先にはやはりゴミ溜めがある。
「皮肉言う前にたまには肉食わせろよ。なんだよ、この料理ッ！」
オレはテーブルを箸で叩く。テーブルの上にはいつもと変わらない惣菜が並んでいる。
「『なんでも屋』第一号の客が来た記念すべき日だぞ。少しくらいお祝いムード出してもいいだろうに」
「お祝い！？　ちゃんちゃらおかしいよ。私にとってお祝いすべき

日は、アンタがしっかり自立して、ここをさっさと出てゆく日だよ。そんときゃ肉でも鯛でも喜んで送ってやるよ」

ばあさんの啖呵にひと言も言い返せなかった。情けないが、それは当分できそうもない。

オレはそっと箸を持つ手を伸ばして、煮豆をひとつつまんだ。

依頼４－３

もしかしたら、もうみつかったかもしれない――。
オレは淡い期待を胸にタキの家を訪れた。
それにしても凄い有様だった。
塵も積もれば山となる――。
まさに言葉通りのものが眼前に広がっていた。
ブロック塀が隠れるほど積み上げられたゴミ袋の山。周囲にはかなり異臭が立ち込めている。かろうじて門の所だけは開けているが、庭は全く見えない。玄関口まではさすがにゴミがよけてあるが、およそ人が暮らせるような状況ではなかった。
「タキさァ～～ん」
呼び鈴、インターホンの類が見当たらなかったのでオレは開き戸を叩いた。
「遅いじゃないかッ！」
突然、左手のゴミの山が崩れ、薄汚れたタキの顔が覗いた。いきなりの出現にオレは驚いて一、二歩後退った。
「タキさん驚かせないでよ」
オレが苦笑すると、タキは汚れたタオルで額の汗を拭った。
「早くぴーちゃん探せ」
タキはオレの顔も見ずに、右手のゴミの山へ足を踏み入れた。折れ曲がったフライパンがゴミの山から滑り落ち、オレの足元に転がった。
オレの期待も虚しく、まだみつかっていないようだ。どうやら予定通りこのゴミと格闘しなければならないようだ。
オレは用意してきたマスクをはめる。ばあさんの話によると、ぴーちゃんというのは瞬きする赤ちゃんの人形らしい。果たしてみつけられるだろうか。
どこから手をつけようかと辺りを窺うと、門の向こう側からこち

らをじッっと見ている女性と目が合った。女性はすぐに視線をそらし、その場を去った。

ただの野次馬か――。

有名なゴミ屋敷だ。興味本位で見物に訪れる人間もいるだろう。

オレはさほど気にも留めず軍手をして気合を入れた。

すると、どこからともなく、「ニャ～」と猫の鳴き声が響いた。

オレには探せるものなら探してみろ、と言っているように聞こえた。

依頼４－４

ぴーちゃんの捜索は困難を極めた。

ゴミに埋め尽くされた住居内、敷地内と懸命に探したがなかなかみつからなかった。

「ぴーちゃん、どこ？　どこなの？」

タキは小さなカラダで何度もゴミの山を登った。だが、ゴミの山が崩れて滑り落ち、露出した肌に何箇所も擦り傷を創った。

「ぴーちゃん、ぴーちゃん……」

タキは何かに取り憑かれたように休むことなく探している。そんなタキの姿を見ていると、気の毒すぎてなんとか見つけてやりたいと思うのだが、なかなか発見には至らなかった。

「くッそォ～！」

縁側付近で足元のゴミを蹴り上げる。すると、どこに潜んでいたのか再び猫がゴミの隙間から飛び出しオレを驚かせた。

猫は俊敏な動きでゴミの山を駆け上がった。そして、身の安全を確信する距離を保つとオレに振り返った。

小馬鹿にされたようで腹が立った。だが、猫の背後に見えるものに、オレの視線は釘付けになった。

ベランダ――。

盲点だったかもしれない――と、オレはゴミが積まれたベランダを見て思った。

部屋の位置関係からすると、ベランダはタキの寝室とガラス戸を隔てて繋がっている。しかし、ガラス戸はゴミに埋もれて開閉できる状態になかった。だからこそ、猫がベランダに出ることなど考えもせずに、部屋の内側だけを探した。

しかし、猫なら外部からゴミの山を利用してベランダにあがることができる。昼寝しているタキからぴーちゃんをこっそり奪った猫は、階段を下り、玄関を抜けて外に出て、ゴミの山を登りベランダ

へと向かったのかもしれない――。
わずかだが可能性はある。オレは想像と逆の道を辿り、タキの寝室に向かった。寝室に入ると、窓際のゴミを全て取っ払い、ガラス戸を開閉可能な状態にした。そして、わずかに興奮しながらガラス戸越しにベランダを一望した。
「あッ、あッたァ～！」
ベランダの左端、ゴミに埋もれるようにしてぴーちゃんは横たわっていた。オレは慌てて鍵を開け、ベランダに出て、ぴーちゃんを拾い上げた。
「タキさん、あったぞォ～！」
オレはぴーちゃんを空に向かって突き上げた。

依頼4―5

「じゃあ、帰りますね」
仕事を終えたオレはタキの家を辞去した。
「この子がいなかったら、この先どうやって生きてゆけば……」
ぴーちゃんを手渡したとき、タキはぼろぼろと涙を零した。
――いい仕事をした。
オレは気分よく帰宅の途についた。
「あの……」
不意にオレを呼び止める女性の声。
薄闇からすッと現れたのは、門外から家の様子を窺っていた女性だった。
「なんでしょうか？」
オレは訝しげに彼女を見る。
「私、山野田タキの娘の綾音（あやね）といいます。日中母がお世話になりましてありがとうございました」
綾音と名乗った女性は深々と頭を下げた。タキに似て、痩身で背が低かった。
「そうですか、娘さんでしたか。お世話だなんてとんでもないです。オレは仕事に来ただけですから」
「仕事？」
「ええ、人形を探してくれと頼まれまして……」
「人形というと……ぴーちゃん？」
「ええ、猫のイタズラで……。でも、見つかりましたので」
「そうでしたか。ありがとうございました。でも、迷惑だったンじゃないです？　家が家だし……」
オレは返答に困って苦笑いを浮かべた。そして、娘としてあの家の惨状をどう思っているのか気になったが、言葉には出さなかった。
「ごめんなさい。身内を前にして正直に言えるわけないわよね」

ほんとにどうしたらいいものか、と綾音はため息を吐いた。
「タキさんにはこれから？」
いえ、と綾音は小さく首を振った。なにか事情がありそうな様子が見てとれたが、オレは質さなかった。親子の問題に介入するほどお節介ではない。そろそろ話を打ち切って、家に戻ったほうが無難だとオレは判断した。
「それではそろそろ失礼します」
「母がゴミを集めだした理由ご存知です？」
立ち去ろうとするオレの背中に向かって綾音は言った。
「さあ……」
オレは背を向けたまま答える。
「私の結婚が原因なンです……」
「オレに話したところでどうにもなりませんよ」
「わかってます。ただ、私……ほんとにどうしたらいいのかわからなくて……」
オレの耳に綾音の泣き声が届いた。振り返ると、綾音はしゃがみ込み、顔を伏せて号泣していた。
「旦那さんは？」
オレは綾音の腕を取り、立ち上がらせた。
「親身に話を聞いてくれます。ただ、申し訳なくて……」
「一体何があったンです？」
綾音は呼吸を整えてから言った。
「母は……私たち夫婦を拒絶するために家をゴミ屋敷にしたンです」

依頼4－6

――私たち夫婦を拒絶するために家をゴミ屋敷に……。

オレは頭の中で綾音の言葉を復唱した。

「母は父が亡くなって塞ぎがちになってました。私はその後、夫と結婚を約束しました。私の結婚を母は喜んでくれるものと信じて疑いませんでした。でも、違ったのです。母はますます自分の殻に閉じこもるようになってしまったのです」

綾音はハンカチで涙を拭って続けた。

「母は婚約者の夫に会うことさえ拒むようになりました。父に次いで、私がいなくなることが耐えられなかったのでしょう。ですが、私には私の人生があります。母も大事ですが、夫と別れることなど考えられませんでした。ですから、母がなんと言おうと結婚の話は進めました」

綾音は大きく息を吐いた。

「結婚式にも母は出席してくれませんでした。夫も夫の両親も病気なンだから、と寛容な態度で接してくれたので私は救われましたが、やはりどこか後ろめたさを感じずにはいられませんでした。しかし、母の病状は悪化するばかりで、ついには折を見て様子を窺いに行っていた私までもを拒絶するようになって、私が訪ねられないように家をあの状態にしてしまったンです。あのゴミの山は私たちの進入を拒むバリケードなンです」

綾音はオレの胸で嗚咽した。

オレは――。

やはり、どうすることもできず、呆然と立ち尽くした。

「すみません……」

綾音は顔を上げ、ハンカチで目頭を押さえた。

「誰かに相談してなんとかなるもンじゃないとはわかってるンです」

綾音はもう一度すみません、と言ってオレから離れた。

「いつかきっと、母の病状がよくなることを信じて待ちます」
綾音は自分に言い聞かせるように言った。
多分、繰り返し繰り返しそう言っているに違いない。
「そうなるといいですね」
綾音はオレの言葉に、ありがとうございます、と頭を下げ、闇の中へ消えていった。
ゴミはいずれ周辺の住民の声によって役場が重い腰を上げ、撤去されるだろう。その時に、タキの綾音に対する負の感情も一緒に消えることをオレは願った。

依頼1－9

午後二時半――。

何事もなく午後五時を迎えるはずだった。

帰宅した城村の妻に、オレを騙しましたね、と笑って言って、この家を去るつもりだった。

しかし――。

城村家には現在、オレを含めて五人の人間が顔を突き合わせていた。

一時間前――。

沙緒が昼食の後片付けを終えると、沙緒のケータイが鳴った。

「ママからだわ……」

沙緒は独り言のように言って、これまでオレに見せたことのない不愉快そうな表情を作った。やはり、ひきこもっている状態では、親子関係もうまくいってないようだ。

すると沙緒は、なにを思ったのかオレのところにケータイを持ってきた。オレは強く拒否したが、沙緒は通話ボタンを押してオレにケータイを強引に握らせた。ひとつ屋根の下で見知らぬ男と過ごす娘を案じて、思わず電話してきたのだろう、と考えたオレは、仕方なくケータイを耳にあてた。

『沙緒？』

城村の妻の声。どことなく沈んだ声をしていた。

「申し訳ありません……青波です」

オレが答えると、城村の妻は深いため息を吐いた。

『こんなときにもあの娘は……。青波さん、沙緒に電話に出るように言ってもらえます？』

オレは沙緒を見て、代わるようにと電話を突き出した。しかし、沙緒は首を横に振るだけだった。

「申し訳ありません……代わりたくないようです」

『青波さん、大事な話だと言ってください』
「わかりました」
オレが巻き込まないでくれよ、と思いながら母親の言葉を伝えると、沙緒は渋々ケータイを受け取った。ケータイを耳にあてると、沙緒は不機嫌そうな表情で相槌を打っていた。
「えッ！？」
沙緒が突然大きな声を上げた。視線が泳ぎ、明らかに動揺している。
一体なにが？
オレは沙緒の様子を窺う。
「待ってる……」
そのひと言を最後に沙緒は電話を切った。
沙緒はしばらくケータイをじッと見ていた。そして――。
「パパが自殺したって……」
オレは言葉を失う。
「遺体確認が済んで、これから刑事と家に戻るところだって……」
沙緒は覚束ない足取りでオレの前に立った。
「青波さん……」
それまで一緒に、と沙緒はオレの胸で泣き崩れた。

依頼１－１０

「どうして自殺だと……」

沙緒は城村の妻と共に家に上がった二人の刑事の顔を順に見た。

大羽という長身で色素の薄い刑事の話によると、城村英輔は、ここから二十分ほど離れた会社近くの雑居ビルの屋上から転落死したらしい。

「遺書らしきメモが上着のポケットに……」

異様に額の突き出た短髪の魚住という刑事が、ポケットから遺書らしきメモが収められた透明な袋を取り出した。

「見ないほうがいいッ」

袋を受け取ろうとした沙緒と刑事の間に、城村の妻が割って入った。しかし、袋は沙緒の手に渡ってしまった。

沙緒はじッと袋を見つめた。その横で城村の妻は手で顔を覆った。

「私のせいでパパは……」

そう言った沙緒の声は震えていた。想像するに、メモには沙緒のことを気に病んでるような内容が記されているのかもしれない。

城村の妻がなにも言わずに沙緒を抱きしめ頭をなでた。久しぶりの親子のふれあいがこんな形で実現してしまったことが、なんとも痛ましい。

「奥さん、娘さんから話を聞きたいのですが……」

魚住刑事はそう言って、メモの返却を求め、手を差し出した。そして、それを大羽刑事に渡した。

沙緒は母親に付き添われてリビングのソファーに腰を下ろした。

キッチンからイスを持ってきた魚住刑事がその正面にすわった。

オレは深く沈んだ表情の沙緒をキッチンから眺めていた。そして、オレの役目は終わった、と考えていた。

帰るか――。

オレがそう思ったとき、オレの前にすッと長身の大羽刑事が立っ

た。
「青波さん……でしたたよね。『なんでも屋』でしたか。おもしろい商売をなさってますね」
大羽は刑事らしからぬ軟らかい口調でオレに語りかけてきた。
「ところで青波さん、これを見てどう思います?」
大羽はそう言って、沙緒が絶句したメモをオレの前に翳した。
オレの見たくないという思いより先に、文字が目に飛び込んできた。

もっと話をするべきだった
すまない
許してくれ

依頼1－11

「ちょっと外へ出ませんか？」
大羽刑事はそう言って微笑んだ。
オレは言われるがままに大羽刑事の後に続いた。
外へ出るまでの間、城村の残した文字を何度も復唱した。

もっと話をするべきだった
すまない
許してくれ

遺書と言われればそうとれないこともない。しかし、どこか違和感があった。そもそも、城村が自殺するとは思えなかった。オレに依頼するくらいだから、沙緒のことを気に病んでいたのは間違いないだろう。
だが、それで死を選択するだろうか？
沙緒はまだ若い。将来を悲観するには早過ぎる。それよりも沙緒が立ち直ることを期待するのが親というものだろう。
現にオレは、城村がオレの報告を心待ちにしていると思っていたのだ。オレの話を聞かずして死を選んでは、オレに依頼した説明がつかない。
「いろいろとお考えになられたようですね」
オレの心を見透かしたように大羽刑事が言った。どうやらオレを外に誘い出したのは、オレに考える時間を与えるためだったようだ。
オレはまァ、と曖昧な返事をした。
「青波さんはこれが遺書だと思いますか？」
大羽刑事が再びメモをオレに翳した。
「見ようによっては……」
「なるほど。逆に言えば、違うようにも見えるということですね。

では、どこに違和感を覚えます？」
「考えたンですが、そこまでは……」
オレは正直に答えた。
「それは青波さんがこの一家の事情をある程度知っているからですよ」
オレには大羽刑事の言葉が理解できなかった。それを予測したかのように、大羽刑事はわからなくても結構です、と話を続けた。
「それよりおもしろい話をしましょう。この遺書らしきメモは、城村さんが普段愛用していたと思われる手帳から切りとられたものでした。ですが不思議なことに、この切りとったページ以降のページにも文字が記されていたンです。その中には、日付入りのメモ書きがありましてね。その日付が、今日より前のものなンです」

依頼1－12

「このメモは、少なくとも二ヶ月以上前に書かれた可能性があるンですよ」

大羽刑事がメモの入った袋を振りながら言った。

「ところで青波さんは、このメモが遺書ならば、誰に宛てられたものと考えます？」

「それはやはり沙緒さんかと……」

オレは城村が残した文章を見ながら答えた。

「ですよね。沙緒さんの現状を知っている人達ならばそう答えるでしょうね」

オレは大羽刑事の言葉に衝撃を受けた。沙緒の現状を知らない人間からすれば、このメモが沙緒のことを気に病んで書かれたものかどうかわからないかもしれないし、それ以前に誰に宛てられたものか特定できる者はいないだろう。

オレは大羽刑事の言葉を思い出す――。

――青波さんがこの一家の事情をある程度知っているからですよ。

「気づいたようですね。この文章が沙緒さんに残したメッセージだと考える人は、沙緒さんの現状を知っている人たちに限られるンです。もっと言えば、この文章を遺書と捉える人たちもです」

「じゃァ、それは……」

「私は遺書には見えませんでした。恐らくは書置きだと考えました。」

「書置き！？」

「ええ、そうです。城村さんの奥さんによると、沙緒さんが『ひきこもり』状態になったのは三ヶ月ほど前だったそうです。ただ、理由は未だにわからないと仰っていましたがね……。それはともかくとして、城村さんがこのメモを記したのが二ヶ月以上前だったことを考えると、沙緒さんが『ひきこもり』を始めた頃に、城村さんが

親としてなんらかの行動を起こしたことは想像に難くないでしょう。その過程でこのメモが使われたのではないかと私は考えています」

オレにとって大羽刑事の言葉は説得力のあるものだった。しかし、だとするならば――。

「ええ、城村さんの死は自殺ではないと思います」

大羽刑事はあっさりと言った。

「このメモが遺書と読み取れる者が、自殺に見せかけるために再利用したンじゃないですかね。そこで青波さんにひとつ伺いたいことがあるンですが……」

依頼１－１３（最終話）

大羽刑事がオレに最後に尋ねたのは、午前十一時から正午までの状況だった。

「沙緒さんを疑ってるンですか？」

オレは信じ難い思いで尋ねた。

「恐らくは……」

そう言った大羽刑事の表情は、言葉以上に確信に満ちているようだった。

だが、オレには沙緒が父親を殺害する理由がわからなかった。大羽刑事は既にそれも掴んでいるのだろうか？

気になるところではあったが、オレは口にしなかった。これ以上事件に係わるのはよそう、と思いとどまった。

「もうオレは帰ってもいいですかね？」

沙緒が犯人である以上、共犯の可能性のあるオレを黙って返すわけがない、と思いつつも一応聞いてみた。

だが、オレの懸念をよそに、大羽刑事は意外にもあっさりと認めてくれた。最早オレの存在など眼中にないといった表情で、しきりとなにかを考えているようだった。

「じゃァ、帰ります…」

二階を見上げている大羽刑事にそう言って、オレは城村家を後にしようとした。すると、大羽刑事が青波さん、とオレを呼び止めた。

「感謝してましたよ」

大羽刑事が唐突に言った。

「感謝？」

オレは大羽刑事がなにを言っているのか理解できなかった。

「間山泉ですよ」

オレはその名を聞いて、あの時の映像が脳裏に瞬時に浮かび上がった。

――女として……女として警察に向かいたかったンです。
――罪を償うにしてもなにかひとつ心の拠り所が欲しかったンです。
もう一度女として生きていくために……。
あの間山泉がオレに感謝しているというのか……。
オレは――。
少しも喜べなかった。
知らずに済むものなら知らないままがよかった。
「関係ありませんよ」
オレは大羽刑事の目を見据えてそう言い、踵を返した。
恐らく、オレが望もうと望むまいと城村沙緒の情報は、今の間山泉のようにどこかしこから飛び込んでくるだろう。少し憂鬱な気分になった。
今朝、城村と歩いた道を逆戻りする。公園の手前でオレに吠え立てた犬と再び対峙した。犬は朝と同じようにオレに激しく吠えた。飼い主は今朝のことをきれいさっぱり忘れたかのように同じ言葉を繰り返した。
オレは少しだけ明日引き受けた犬の散歩が面倒になった。
（了）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2684m/

なんでも屋

2011年6月7日15時55分発行